

# 琉球大学学術リポジトリ

## 戦前のハワイにおける「琉球盆踊」の歴史 –マウイ島内での継承とその背景について–

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): マウイの沖縄県系人, 琉球盆踊, エイサー, 沖縄芸能 キーワード (En): Okinawan immigrant society in Maui(Hawai'i), Ryukyu Bon Odori, Eisa, Perfonning Arts of Okinawa 作成者: 遠藤, 美奈, Endo, Mina メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010117">https://doi.org/10.24564/0002010117</a>

## 戦前のハワイにおける「琉球盆踊」の歴史 —マウイ島内での継承とその背景について—

遠藤美奈

- I. はじめに
- II. 現在の盆踊り
- III. 戦前の盆踊りの概況
- IV. 「琉球盆踊」の評価
- V. 振付けと装束
- VI. おわりに

キーワード：マウイの沖縄県系人，琉球盆踊，エイサー，沖縄芸能

### I. はじめに

多民族社会においてマイノリティの文化的な活動は、その在住する社会に対する同化と同化への立場の表れとして、自文化の表出や回避といった動きをみせる場合がある。その際、自らを表現する手段として、芸能を用いる事例は、多くの地域のマイノリティに見られる。

ハワイにおける沖縄県出身者が行う芸能もまた、文化的なアイデンティティを表象する一例として諸分野において研究がなされてきた。日系社会におけるマイノリティコミュニティであった沖縄県系人のコミュニティの形成維持には、沖縄の芸能が寄与しているという点で、注視されてきた。だが、従来の研究では、実際に行われてきた芸能の具体的な内容に関する言及は比較的少なく、十分検討がなされてきたとは言いがたい。

沖縄県系人は、本土系出身者とは異なる文化、慣習、言語を持ち、多くの場面で蔑視されてきたとされ、同様に彼らが行う芸能もまた見劣ったものであると考えられていた。しかし、戦前のハワイでは、ハワイ在住の沖縄県系人による演奏会（演芸会）や角力、沖縄からの芝居一座の来布など、極めて活発な文化活動や興行活動が見られ、対外的な芸能活動が盛んであったといえる。文化的に劣っていると見なされていたはずの沖縄県系人が自らの芸能を大々的に行う事を可能にした背景には、一体何が関係しているのだろうか。その背景を明らかにするため、沖縄由来の芸能の継承に関する歴史的な潮流を考慮し、少数派の集団の芸能実践に対する、より多数派の集団の動向を注視する必要がある。

本研究では、多数派の本土系出身者と少数派の沖縄県系出身者の両者が互いに行っていた同系統の芸能である盆踊りを研究対象とし、沖縄県系人を取り巻く他者を通じて、戦前

の沖縄芸能の伝承を支えた背景とその内容を明らかにする。主として、戦前期において沖縄県系出身者の割合が最も高く<sup>1)</sup>、現在においても沖縄由来の盆踊りを積極的に伝承しているマウイ島を対象地域にし、当時の新聞『馬哇新聞 (1915-1941)』等の史料を中心に扱い、分析考察を行う。

## II. 現在の盆踊り

ハワイの盆踊りは、日系二世たちが定着させた「ボン・ダンス」(Bon Dance)の呼称で一般的に親しまれている<sup>2)</sup>。日本のそれと大きく異なる点として、盆踊りが行われる期間が極めて長い事をあげることができる。開催日程は、宗派を問わず各寺院の開教使が集まり、話し合いで決められている。そこでは、およそ6月から9月までの毎週末に行われるよう予定が組まれ、参集する人々の拡散を防ぐため、近隣寺院の盆踊りの日程が調整される。調整された日程は、大多数の寺院が本来の旧盆の時期から外れることになり、旧盆行事の脈絡からも外れているように見える。だが、今日ではメインとなった盆踊りを行う前には、檀家や信徒を対象とした説法や読経が行われ、宗派によっては盆踊り後に燈籠流しを行うなど、日にちにとらわれない盆行事を行っているといえる。また、近年では盆行事を目的としないイベント型の盆踊りやリゾートホテルで行われる観光型の盆踊りも見られる。

ハワイの盆踊りの様相は、中央に櫓(やぐら)を立て、提灯を張り巡らせ、日本本土の地域行事で行われる盆踊りとかなり類似している。しかし、ハワイの盆踊りの会場の多くは寺院である点が、日本とは大きく異なる。寺院では開教使が法要や供養を行う以外、当日のプログラムや進行、盆踊り演目、その他余興の招聘など、盆行事に関わる全スケジュールは寺院に属するメンバーによって取り仕切られることが多い。盆踊り会場では、ランチプレートやシェーブアイス(かき氷)、バザーなどの露店が寺院のメンバーを中心に开店され、祭りそのものである。露天での収益は、寺院のみならず所属メンバーの活動資金としているところもあり、近隣寺院との同日開催による参加者の分散を避ける狙いもある。

盆踊りの演目は、移民者の出身県に由来する《岩国音頭》《福島踊り》、その後流行した《炭坑節》《東京音頭》、近年のJ-POPから洋楽まで幅広い。《岩国音頭》《福島踊り》は囃子を継承するグループが組織され、そのグループがライブ演奏を行う。それ以外の演目は、CDやカセットテープを伴奏に踊る。新しい演目が毎年のように導入されていく中、移民者の出身県に由来するライブ演奏の演目は個人の出自に関わらず、根強い人気を博している。

一方、沖縄系の盆踊りは、地謡、踊り手、囃子方(太鼓)で構成され、櫓の上に地謡が上り、囃子方(太鼓)は櫓の中央で沖縄中部のエイサーに見られるような太鼓のパフォー

マンスを見せながら舞う<sup>3)</sup>。この沖縄系の盆踊りが主として継承されてきた寺院には、沖縄系のコミュニティや沖縄県系人が多く所属するオアフ島浄土真宗(西本願寺派)慈光園、マウイ島臨濟宗妙心寺派ハワイ開教院(通称:臨濟禅)などがある<sup>4)</sup>。なかでも臨濟禅は、ハワイ諸島内で本土系の演目を入れず、沖縄系の演目だけを戦前から継承し続けている唯一の寺院であろう。沖縄系の演目とは、《久高萬壽主》《スーリ東》《テンヨー節》などで、今日の沖縄のエイサーで用いられる演目と類似するものが大半を占めている。演目のみならず、盆踊りの最初に《エイサー》と呼ばれる《継親念仏》を踊る点は、沖縄のエイサーの基本的な行い方を守っている。

また近年、ハワイでは、フラダンスの演目の中へ《涙そうそう》などのオキナワンポップスの流行が見られ、人気を博している。他の芸能にもオキナワンポップスが取り入れられ始めているが、沖縄系盆踊りの演目の中には、その導入は見られない。沖縄県系人の中には、伝統的な盆踊り演目に対する固執や思考の傾倒も見られるが、新しい演目の導入には少々時間と労力を必要とすることも要因の一つではないだろうか。沖縄系の盆踊りは全演目がライブ演奏で行われるため、地謡、踊り手、囃子方(太鼓)への指導を必要とし、新曲の導入は容易ではないのである。

近年では、ハワイ沖縄青年会のようなライブ演奏の地謡と華やかな囃し方(エイサー)は、人気と集客力を持つ事から、様々な寺院からの演奏依頼がある。基本的には、地謡、踊子、囃子方(エイサー)が一つの集団で組織され、夏季期間の毎週末、オアフ島内外の盆踊りへ大忙しの日々を送っている。

### Ⅲ. 戦前の盆踊りの概況

#### 1. ハワイ諸島における盆踊りの概要

1885年に官約移民が開始されたが、沖縄県出身者のハワイへの渡航はその15年後の1900年と少し遅い。遅れて到着した沖縄県出身者は、本土出身者とは異なる慣習を持った新参者として扱われ、厳しい環境下におかれていたとされている。

しかしながら、東北地方、中国地方、九州地方といった諸地方の出身者が、各地方とも共通の慣習を持ち合わせ共有していたとは考えにくく、ある程度各県の習わしを持った生活が営まれていたことが想定される。そのため異なる文化や慣習に関係する諸問題は、沖縄県出身者だけが直面したのではなく、沖縄県出身者の移入以前から日系人社会の中にも存在していたのではないだろうか。

各々の故郷(あるいは出身地域)による文化的な差異がありつつも、本土系出身者は砂糖キビプランテーションの中で盆踊りを定着させたのだが<sup>5)</sup>、本来の盆行事の目的とは違っていたようだ。その目的とは、自らの祖先に対する供養ではなく、先に移入し開拓した

先亡者の御霊を慰めるために催されたといわれている。盆踊りの時期が迫ると、各プランテーション耕地では踊りの練習が頻繁に行われた。また、盆行事の宗教的な意味を持ち合わせていたかは不明だが、盆踊りは異境の地で生活していく人々の数少ない貴重な娯楽の一つとして重要な役割を果たしていたようである。

1890年代、佛教がハワイへ布教しはじめると、プランテーション耕地内の空地などで行われていた盆踊りは新たな局面をみせはじめる。佛教の布教は、浄土真宗を皮切りに20世紀初頭からハワイ諸島の各地へ広まり、浄土宗、曹洞宗、日蓮宗、真言宗などが次々に入り、各宗派がプランテーション耕地内に寺院を建立し始めた。寺院は、付属の日本語学校を併設させるなど、日系人社会にとって文化や教育などの拠点となっていった。盆踊りは本来、佛教の盂蘭盆会で行われるものであり、ハワイで次々に建立される寺院においてすぐに結びつくはずであった。しかし、プランテーション耕地内ですでに催されていたためか、各寺院は盆踊りの代わりとして当時流行していた活動写真などを取入れて盆行事の余興とした。そのため盆踊りを盆行事の一部として行い始めた寺院が現れ始めるのは1914年と比較的に遅い<sup>6)</sup>。寺院の境内や付属施設の庭などで行う盆踊りは、ゆるやかに定着していったようだ。その後、盆踊りは、プランテーション耕地の閉鎖にともない、寺院で行うことが一般化し、日系人の年中行事の一部として欠かす事のできない場と行う意味が付与された。一方で寺院もまた、年に一度、盆踊りを催すことによって、寺院自体が地域社会に溶け込み、そして寄附等の援助を受け存続することができた。

しかし、盆踊りは必ずしも日系人コミュニティの中で風紀的に好まれるものではなかった。毎年、盆踊りの開催時期になると、新聞紙上では盆踊りに集まる青年男女の醜態について問題視する声が投書された。1918年の『馬哇新聞』には、娯楽の少ないハワイにおいて、年に一度の催しである盆踊りに反対しないと前置きを入れながら、学童の参加を考えるべきではないかとの投書が寄せられた。青年男女が入り乱れ踊る盆踊りの場に幼少の子供達が参加することは、教育上悪く、盆踊りの在り方について考えるべきだと訴えた<sup>7)</sup>。その結果、同年、新聞紙上において盆踊りの開催を告げる広告は見られない。翌年になると、寺院開催の盆踊りについては、細心の注意を払うことを前提とした盆踊りが再び開催され、飲酒者は排除し、決められた服装を身につけた者だけが輪の中に加わる環境へと変化した。他の民族コミュニティが共存しているハワイ諸島内では、日系人の言動は自文化の乱れを正し戒めるだけではなく、醜態をさらす低俗的な民族であることを他の民族の目に触れさせないためでもあった。それは多文化社会の中で生きるために、常に他コミュニティの存在を意識し、日系人としての地位を配慮した動きでもあったと考えられる。

一方、沖縄県系人によって行われた最初の盆踊りは、1910年カウアイ島ケカハ(Kekaha)耕地で行われたものだとされている<sup>8)</sup>。故郷沖縄において三線の技量に優れた仲真良永(1875-1934)とケカハで組織された沖縄県人会が中心になって行われたものである。また、

ケカハ耕地で「琉球盆踊」が行われた同年の10月、オアフ島エワ (Ewa) 耕地においても「琉球盆踊」が催されている。ケカハ耕地の盆踊りの目的は、既にハワイの地で亡くなった先亡者を対象としている。これは前述したような本土系出身者による初期の盆踊りと同様である。これに対し、エワ耕地の盆踊りは天長節の余興として催された点は、注目に値する。故郷から離れた異境地では、本来の慣習がその目的の脈絡から外れやすく、縛りに囚われる事がない事例を鑑みると、「琉球盆踊」も同様に祖霊の御霊を供養する目的から先亡者へ、そして天皇を祝賀する慶賀の踊りとして用いられたことは、伝統的な行事の在り方の再編として見ることができるだろう。

## 2. マウイ島における「琉球盆踊」の登場

各島において「琉球盆踊」が開始され始めていた頃、マウイ島在住の沖縄県出身者の動向を伝える新聞記事は少なく<sup>9)</sup>、「琉球盆踊」の開催に関する記事は1922年まで待たねばならない。1922年のその記事は、沖縄角力の大会開催に伴う前評判などを伝えており、前年の1921年に催された盆踊りを懐古している。恐らくこれがマウイ島で最初に「琉球盆踊」を伝えた記事である。

1920年代に入り沖縄芸能の公演や角力などがマウイ島で紹介され始め、沖縄の人々の文化に関する活動に注目が集り、「琉球盆踊」も同様に新聞紙上にたびたび登場し始める。1925年には、プウネネ浄土宗境内において、寺院開催としては初めて「琉球盆踊」が披露された。だが、翌年以降7年間に亘って寺院やプランテーション耕地内での開催記事が見られなくなる。その要因として、まず沖縄県出身者よりも先に移住していた他県人らの寄附によって成立した寺院は、すでに檀家や信徒など、中心メンバーは日系人を構成する上位県の出身者であり、彼らの故郷の盆踊りである《岩国音頭》《福島踊り》《新潟踊り》などのレパートリーが、すでにある程度、固定化されはじめていた。そのため、「琉球盆踊」は、あくまで招待枠の踊りであったことが考えられる。また、寺院での開催には本土系出身者の多くが佛教徒であり、寺院との結びつきは自然な流れであったのに対し、沖縄県出身者の大多数は祖先崇拜とする独特の宗教概念を持っていたため、寺院と結びつくという概念が希薄であったことが関係していたのではないだろうか。次に、プランテーション耕地内で開催される盆踊りは、耕地での単独開催であったため、そのグループが広告を出さない限り、その催しが新聞紙上に掲載されることがないため、記録が残されていない。

「琉球盆踊」が『馬哇新聞』紙上で紹介され始めた同時期、1927年石垣島の桃林寺(臨濟宗妙心寺派)の僧侶であった岡本南針が単独でマウイ島を視察並びに布教のため訪れていた。岡本は、沖縄県出身者コミュニティとの接点を持ち始め、1930年にはマウイ沖縄県人会から分裂した馬哇同志会の発会式に来賓として招かれている。その後、1932年沖縄県出身者の協力を得て、臨濟宗妙心寺派ハワイ開教院を建立させ、華々しい開堂式を挙げる

ることとなった。これにより、それまで招待枠であった「琉球盆踊」は自らの盆踊りを行う拠点を完成させたと考えられる。

#### IV. 「琉球盆踊」の評価

##### 1. 新聞紙上による評価

「琉球盆踊」のみならず、沖縄県系人の動向が『馬哇新聞』紙上で扱われるまでかなりの年月が費やされており、本土出身者と沖縄出身者との間に深い溝があったと推測される。

しかし、移入後20年が経過した1920年代に入ると、沖縄県出身者のコミュニティ発会に伴う活動の活発化によって、本土出身者との接点が増加し、本土出身者側に明らかな変化が見え始める。1922年の吉間観静一座による琉球芸能の上演、沖縄角力の流行を経て、それまですべてにおいて遅れていると日系社会から見られていた沖縄県出身者による文化的な活動が、本土出身者の注目を浴び始める。本土のそれらとは異なる趣向と風情が存在する琉球の芸能は、本土系出身者に新たな見識を与える契機を作り出した。

由来沖縄県人といへば内地人よりは何事も一步も二歩も遅れているかの様に内地人は思っていたが是れは/恰かも日米間に於けるが如く言語が十分に通じ合ない結果から起る感想であった/近来沖縄県人と内地人接触は漸く繁くなりつつあるにつれ在留同胞の種々な催しにも沖縄県人が加はり或は同県人が単独で色々の余興などする様になった而して昨年などワイルクで/沖縄の盆踊りをやった所が何がサテ内地風の不しだらや大道ダンス等の見苦しい事なく/全く以て意想外な整然たる立派な踊り振りに内地人は驚歎の眼を見張った程であった/(中略) 要するに■れに乱れた内地風の而かも観客は同胞に限られたる興行事以外比較的一般向きのする沖縄県流の興行事が頭を■げつつある事は欣ばしい次第である

「沖縄角力で各島力士の決戦 大会を開くの議が進んだ日本相撲よりは面白い」

『馬哇新聞』1922年8月29日

盆踊りに関しては下線に示した通り、他の芸能のような見苦しい箇所はなく、秀逸な芸能を行っていたことを高く評価している。このように高く評価された背景には、当時の沖縄の盆踊り（エイサー）が整然とした踊りであったかは不明だが、かなりの練習時間をかけ、娯楽としての盆踊りではない修練された踊りを披露していたことが想定される。それは、日本本土の盆踊りとは異なる文脈の中で培われた沖縄の盆踊りの素朴さに、本土系出身者が驚嘆を隠せなかったためではないだろうか。

また、このような「琉球盆踊」の高い評価は新聞紙上において度々見られ、1930年代に入る頃の「琉球盆踊」は、当時最も流行していた《岩国音頭》《福島踊り》らと肩を並べ始め、日系社会の盆踊りの代表格としてその名が定着しはじめた。盆踊りが開催され始め

る時期になると、『馬哇新聞』の読者投稿欄には、以下のような所感が寄せられた。

▲盆踊りを観て感じたのは沖縄は踊りが立派岩国は音頭が聞きもの福島は囃方がよりといふ結論に達した事である (踊り ■■■)

…「オモチャ箱」1925年7月17日

▲盆おどりは東北でも岩国でも面白いが規律が正しくて上品で面白いのは琉球おどりが一等だとは定評がある (夫々特色がある)

…「オモチャ箱」1932年8月3日

▲盆踊りは岩国音頭もベッチョ踊りも沖縄踊りに圧倒された傾向である矢はり善きものが優勢になるらしい (外国に適しく上品)

…「オモチャ箱」1933年8月11日

加えて、日本での沖縄の音楽の流行が彼等の高い評価を後押ししている。同時代秩父宮殿下が上覧し、折口信夫や田辺尚雄らが賞讃した沖縄の芸能一座が来布し、ハワイ巡業を行った。当時の新聞記事には、「(前略) 何分宮殿下の清覧を得た程の技量であるから悪からう筈なく (後略)」と掲載され、日本での流行や沖縄芸能に対する高い評価が紹介された。皇族や研究者の賞讃を受けた芸能を有しているという点において、劣った人々というレッテルは剥がされ、沖縄由来の文化芸術に対する評価の再構築が、海を越えてハワイの日系社会の中へも影響を見せ、沖縄県系人の自らの地位の向上へと繋がったと考えられる。

## 2. 競演会での活躍

さらに、「琉球盆踊」の評価を確固たるものとしたのは、競演会 (Competition)<sup>10)</sup> の存在であった。マウイ島で最初に行われた競演会は、第16回馬哇共進会の一部として1933年に催された。主催者は、ラハイナ在住の旅館業等を営む沖縄県出身者の仲村常昭である。マウイ島を3地域 (東・中・西) に分け行われた大会では、一組に対し7つの演目を競わせ (最終演目だけは25名の出演人数に規制を設けた)、各日系新聞社長を審査員に置いたほか、ホノルルから役者が招聘され、沖縄から新しい獅子舞を購入 (輸入) するなど、大々的な催しであった。異境の地でありながら役者や舞踊家など多くの芸能家が在住していたハワイゆえに催せたのだろう。記事上では沖縄県人の郷土芸能を懸賞付きで挙行するとされ、一方の主催者である仲村氏の広告では日本人の芸術と流行踊りの大競演があると記述されており、多民族コミュニティが一堂に会す共進会において、自らの文化が日本の芸能の一部との認識の上で開催していることは注目に値する。当時の沖縄由来の音楽と舞踊は、前述したように、本土での流行の勢いそのままにハワイにおいても大流行を見せていた。競演会では、芸能だけではなく武術も披露され、まさに流行の最先端に行く芸能を催すとあって鬼に金棒であると称された<sup>11)</sup>。





写真1 郷土芸術大競演会広告



写真2 第二回馬哇舞踊競演大会出場記念集合写真 (1934. 9. 15-16)

翌 1934 年には、新しい流行踊りを対象とする競演会が催されている。ハワイ在住者にとって主たる踊りといえば盆の時期に踊られる《岩國音頭》《福島踊り》等であったが、この時期より日本から輸入された SP レコードの普及によって新しい踊り（音楽）が流行し始める。それまでの出身県を由来とする盆踊りとは異なる、新しいそれらの踊りは「新流行踊り」または「流行踊り」として区別されて呼ばれていた。マウイ島では三富某氏が振付を担当し、マウイ島の四か所（ワイルク内）で毎朝午前 8 時から午後 4 時、午後 7 時から午後 10 時まで踊りの稽古がつけられた<sup>12)</sup>。人々はたちまち新しい踊りに魅了され、新しい踊りを対象とした競演会を切望し、ワイルク（Wailuku）の宮本興行部主催によって開催されることとなった。

好評を博した流行音頭踊競演会の同年、別の興行主もまた、競演会の盛況を受け、再び競演会が催された。この競演会は、流行音頭のみならず《岩國音頭》や《福島踊り》などを含むことを許可した点は、前回と異なる。多くの団体が地域コミュニティから出演したのに対し、「琉球聯合處女組」だけは沖縄県出身者の子弟の構成で出場した。各地域からの選抜された少女というわけではなく、主として沖縄県出身者が多く住み、臨済禅のある下パイア在住の少女たちであった。ただし、地域によって分けられた団体の中に沖縄県出身者の子弟が含まれていないわけではない。「琉球盆踊」は、沖縄県出身者の間で継承されてきたため、地域主体の団体とは異なる形で出場したと考えられる。この大会には 15 団体が参加し、その演舞を競い合った。

競技の結果、踊り演目として台頭してきた流行音頭踊を押さえて「琉球聯合處女組」が見事一等を獲得し、改めて日系人社会の盆踊りの代表格としての地位を確固たるものとした（表 1）。また、踊競演会は 37 年 38 年と続けられ、38 年の大会には、34 年に優勝した団体の地謡と太鼓奏者をメンバーに、新たな踊り子が特別枠で出場し、特等を授与した。

表1 第二回踊競演大会 (1934年9月15-16日)

出演順	演目	団体	等賞
1	日の出音頭、東京甚句	下パイア少女B組	
2	東京甚句	クラ聯合少女組	
3	月夜囃し、東京甚句	ワイルク少女B組	
4	新おけさ、横須賀踊	スペクルス聯合B組	
5	東京甚句、新おけさ	ハイク聯合B組	
6	櫻音頭、昭和盆踊	上パイア聯合B組	
7	紀の國音頭、大阪甚句	下パイア少女A組	五等
8	台湾踊、鹿児島小原節	マカワオ少女A組	
9	大島おけさ、樽をたたいて	プウネネ東五番少女A組	六等
10	親の恩踊、琉球はとま踊	琉球聯合處女組	一等
11	鹿児島小原節、新おけさ	ワイルク少女A組	四等
12	納涼音頭、鹿児島小原節	ハイクウ聯合少女A組	
13	櫻音頭、東京音頭	ハマクアポコ少女A組	
14	新おけさ、鹿児島小原節	スペクルス聯合A組	二等
15	昭和盆踊、納涼音頭	上パイア聯合A組	三等

出所：1934年9月18日『馬哇新聞』より作成。

「琉球盆踊」は、本土系出身者と同じ土俵上で競い合い優勝したことで、公の評価を受けたのである。

1934年に行われた第二回馬哇舞踊競演大会は、流行音頭を対象とした競演ではあったが、出演団体の演目が掲載されている点で「琉球盆踊」の様相を知る手掛かりとなる。踊られた演目は2曲であったが、演目が新聞紙上で記述されることは稀であるため、注目したい<sup>13)</sup>。

出演団体が《東京甚句》《鹿児島小原節》などの当時のSPレコードの流行と連動した演目を選曲しているのに対し、「琉球聯合處女組」の演目は明らかに故郷沖縄を意識したものとなっている。《親の恩節》は、代表的な沖縄の念仏歌であり、流行音頭とは性質上異なる。流行音頭競演会の演目ながら念仏を取入れ流行曲と組合せ、盆行事の縮小版とした所に彼等なりの沖縄らしさが表出されているように見える<sup>14)</sup>。

だが、《琉球はとま踊》については、流行踊りとして捉えるには、現在の沖縄の盆踊り(エイサー)にはないレパートリーである。流行踊競演会の性格上、当時流行した曲を取り入れたことは容易に理解できるが、移民者の大半を沖縄本島出身者が占める中で、八重山の踊りを選曲することは異例だと考えられる。また、故郷沖縄では、伊良波尹吉作の《鳩間節》が一世風靡し、芸能家のハワイへの渡航により伝播した可能性を示唆できるが、集団で演舞していることから何らかのアレンジが加えられたと推察される。また、日本本土においては、SPレコードの普及とともに家庭内で楽しむ新しい踊りや音楽の普及の動きがあり、沖縄音楽を題材とした流行踊りの演目の可能性もあり、《鳩間節》にはさらなる考察が必要である。

本来、異なる出身地の盆踊りは、他者との差別化が図れると同時に、地域色が全面的に表現されているため批判的ともなりえた。それにもかかわらず、沖縄県系人の盆踊りの継承の背景には、高水準の踊りを行っていただけではなく、マウイ在住の本土系出身者の高い評価、コンテストという公の絶対的評価、そして日本の皇族や研究者による賞讃や日本国内の流行など裏付けがあったのだ。また、伝統的な念仏踊りと、盆踊り演目としては珍しい《琉球はとま踊》を組合せるなど、新流行音頭の台頭に押されない、独自の盆踊りを継承してきたと考えられる。

## V. 振付けと装束

戦前に行われた「琉球盆踊」を伝えた記事は、他の盆踊り記事が登場した時期よりも遅く、盆踊りの詳細を伝える内容の記事は少ない。しかし、《岩國音頭》や《福島踊り》も同様に、寺院の余興の一部であるため、実際の踊りの演目や歌詞を明らかにすることはむずかしい。数少ないマウイ島の「琉球盆踊」を伝える記事から、以下の2点に注目し、その様相に迫ることにする。

### 1. 振付の統一

臨濟寺院の開堂式は予定のごとく一昨日午後■時より厳粛に挙行された参式者は全マウイより押寄せ稀に見る盛況を呈したその呼物たる東西マウイ連合の琉球盆おどり並に奉納演芸が土、日両夜とも本島未曾有の人出で下パイアは人と車の洪水であった

西マウイから数台のツラツク（マ）で殺到した踊子連（れん）を東馬（とうま）の踊子総出で迎へ下パイア奈良丸劇場で合した一同は彼處で盛装し蛭々長蛇の隊を組んで数十名より成る音楽団を先頭におどり場に向って徐々に進むその数実に五百、踊子数の多きと馬哇（まうい）に於て未間に■すると云はる踊場は中央に広大なる四方形のステージを設けて装電し琉球音楽団の一隊にナパロ君のピアノも加はり全場をゆるがす。天空一点の雲なく晴れわたり十五夜の月光皎々として全地を蔽ふ夜五百の踊子総ユカタにて大円陣を三重に描き踊におどる秩序整然正に一系（マ）乱れず、踊りの高尚にして優雅なるに数千の観客は一驚した（後略）

「中央マウイを不夜城の歓楽郷と化した一昨夜来の諸行事」『馬哇新聞』1932年8月12日

筆者は先の研究で、すでに臨濟宗ハワイ開教院の開堂式の様子から「琉球盆踊」の特徴と内容を数点挙げたが<sup>15)</sup>、ここでは踊りが統一されていたことに再度注目したい。上記の記事のとおり、1932年の開堂式に参集したのは全マウイの各プランテーション耕地に在住の沖縄県出身者と子弟である。沖縄県出身者として大別すれば同郷であるが、実際は異なるムラ出身者の集合体である。沖縄の多くの民俗芸能は、ムラ単位で少なからず差異を持

ち、その差異を持って自らのムラの特徴としている。そのため、異なるムラ出身者の集合体である沖縄県系コミュニティにとって、盆踊りもまた、同様の曲を用いた場合においても、各々のムラの異なる振り付けを持っていたことが想定される。これまでの「琉球盆踊」の評価に見られるように、一糸乱れず整然と踊るためには、踊り方の統一が図られていたと考えざるを得ない。さらに臨済宗の開堂式に参加したその踊子の数が 500 人となれば、演舞を揃えるためには相当の修練期間が必要である。注目すべきは、東西の異なる地域に在住していた沖縄県出身者が一堂に会し、秩序整然に踊った点である。

戦前、プランテーションという居住区に根差したコミュニティの意識は強く、各県人会組織はこのプランテーション（あるいは地域）単位を支部に見立てた活動を行っていた。本土系の盆踊りグループ（いわゆる「連」）もまた、プランテーション耕地内で組織され、寺院や異なる耕地の盆踊りに参加し活気づけ華を添えた。しかし、プランテーションが解体されると、人々の移動により、それまで培ってきた組織力を急激に失った。この点において、人々の移動に左右されることがない寺院を中心とした「琉球盆踊」は、伝承過程の早い段階で継承の土台を固めたと考えられる。

踊りの振付に関しては、島ごとに舞踊や地謡の心得のある人物らによって、故郷のものを踏襲した可能性がある。ハワイで最初の盆踊りを開催したカウアイ島ケカハ耕地の盆踊りに関する記述の中で、地謡は泡瀬出身の仲眞良永氏、太鼓も泡瀬出身志喜屋氏が担当し、振付を宮城、宜野座、小渡、瀬名覇の諸氏とある<sup>16)</sup>。振付者の出身地域は不明だが、地謡の仲眞を中心としているところをみると、中部地域の音楽を基本とした盆踊りをケカハ耕地で共有したのだろう。一方、ハワイ島パアウイロでは、1930年に「琉球盆踊」を行ったが、その際の踊りを神山三郎氏が振り付けたと『日布時事』は伝えている<sup>17)</sup>。このように各島や各プランテーション耕地で行われた「琉球盆踊」は、芸能の心得のある人物らによる振付のヴァリエーションを持った踊りであったと推測される。ただし、プランテーションを転々とする者や諸島間の交流があり、ある地域で始まった「琉球盆踊」の演目や踊りが各地域へと持ちこまれ広まった可能性も考えられる。

このようにプランテーション耕地内という極めて限られていたグループの中で継承されるのが比較的一般的であった時代、盆踊りが島内で統一されることは、極めて稀な状態なのである。振付や演目の統一によって、沖縄県のどのムラの踊りであるかといった側面は排除され、マウイ島の「琉球盆踊」を作り出すと同時に、プランテーション耕地の枠にとらわれないマウイ在住沖縄県系人という一体感を作り上げることに繋がったのではないだろうか。

## 2. 衣裳と採り物

1934年の競演大会の装束は、「一、服装は日本衣に限る事 質素を旨とし絹衣類を着用



写真3 地謡の装束 (左: 1934年 右: 1938年)



写真4 囃し方の装束 (左: 1934年 右: 1938年)

せざる事」と規則を定めている<sup>18)</sup>。写真2の1934年の競演大会へ出場した際に用いられた地謡の装束は、三人が異なる柄の浴衣に、三線を引き下げ、サージを後ろで縛り、笠を被ったようである。特別参加として出場した写真3の右1938年の装束は一変し、地謡三人が同じ羽織袴(琉球の左御紋入り)を身につけ、バチは一般的なツメではなく、細長い木の棒のようなバチを用い、前回用いた笠とは異なり、かなりシンプルな造りへと替えられている。

一方、囃子方も両年で大きく異なる。写真4左の34年は頭に萬サージをつけ、浴衣にタスキをかけ、写真4右の38年には踊子と同様に前結びの白い鉢巻をしながらも、左御紋の入った上衣にタスキをかけ、足元は脚絆のようなものを身につけているように見える。最も異なる点は、34年の締め太鼓は、自らの手で支えながら叩いていたと推測されるのに対し、38年の締め太鼓には、自らが首から下げられるよう、太鼓の胴に補助の紐が付け加えられている。

踊子の衣装は一様に揃えられ、見た目にも美しく揃えられている(写真2)。1934年の集

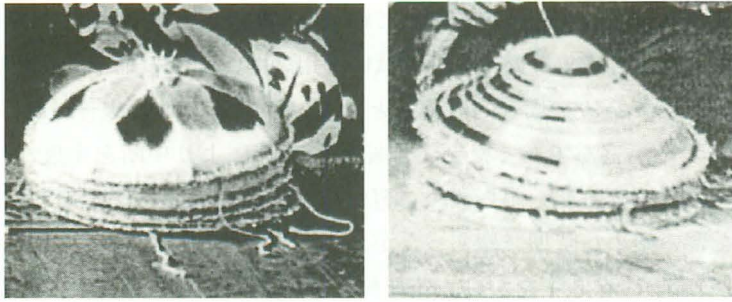


写真5 踊子が用いた笠 (左: 1934年 右: 1938年)

合写真には、踊子の帯などに採り物が見られない。ところが、1938年の集合写真に写る踊子の帯には四つ竹、扇子が挟まれており、かなり多くの採り物を用いた演目を披露したようである。このような採り物の多様化は、1930年代には定着していたと見られ1933年オアフ島ワイパフ (Waipahu) にあるワイパフ本願寺の盆踊り記事にも登場する<sup>19)</sup>。記事では、盆踊りに参加する者は、必ず浴衣を身につけ、傘 (ママ)、四つ竹、シタミ (ママ)<sup>20)</sup>、ジエを持参とされている。採り物の多様性は今日の沖縄のエイサーにも見られ、その他に手拭いなどを必要とする地域もあるが、踊子に対し傘 (笠) の着用を求める地域はほとんど見られない。一方で盆踊りの地謡が用いる笠は、マウイ島の地謡が身に付けた類と同種のもので、現在の沖縄のエイサーの地謡の間でも一般的な装束の一つとして定着している。

両年ともに踊子が笠を用い、またオアフ島の盆踊り記事においても傘 (笠) の着用が認められることから、笠 (傘) が盆踊りに欠かすことができない装束の一つであった可能性が高いと考えられる。また、演目が明らかな1934年の《親の恩節》《琉球はとま踊》のうち、八重山地方に伝承される《鳩間節》及び伊良波尹吉の《鳩間節》には恐らく笠は用いられていないことから、《親の恩節》、念仏歌を踊る際に笠が必要となったと推測される。

戦前の沖縄本島の盆踊り (エイサー) について、「顔が見えないように頬かぶりをした」<sup>21)</sup>と云い伝えた地域が見られるように、顔を隠すという行為に重要な意味が込められていたようだ。それは、八重山諸島のアンガマーと類似した観点のようである。また、1928年に山内盛彬は『琉球の盆踊』と題して、盆踊りの盛んな越來あるいは美里周辺 (現在: 沖縄市) で見られる女性の装束について、以下のように述べている。

男の服装は黒の繭頭巾を巻きつけて後方に垂らし、その上から天蓋の様な面垂を被り、衣裳は山藍の薰り高い懇の芭蕉衣を涼しく着流し、帯等右脇に結んで、左脇には煙草入や手巾をぶら下げたものも居る。女は同じく紺地の単衣に兵児帯を締め、袖は袂でない廣袖に、頭には手製の麦藁笠を被って、手製の手巾を肩に打ちかけ、手には扇子と四つ竹を持ち、頸には首飾のシシ玉をかけたものも居る。

また、読谷村にも同様に女性が笠を被って踊ったという記録が残されている。読谷村内のいくつかの地域では、笠あるいは笠と手拭いを用いて、女性の踊り手たちは顔を隠して踊っていたというのである。代表的な地域として、宇楚辺のエイサーがある。宇楚辺は、明治期よりエイサーが盛んであったが、風紀等の乱れにより中断を余儀なくされ、1930年ごろに嘉手納の千原エイサーから改めて習い、復活させたという地域である。ちょうど千原エイサーを習い始めた時期ではあったが、それまで行われていたエイサーの衣裳として、「女性は緋の着物にタスキをかけ、花を飾ったムンジユル笠を被っていた」<sup>22)</sup>と記録が残されている。

やはり、マウイで用いられた笠は、山内や読谷村に残る記述と同じ麦藁笠とは異なる素材の手製の笠のようではあるが、移入した先で簡略化させることがない、盆踊りに必要な採物であったようだ。特に、当時の越来あるいは美里の装束は、1938年の競演会や1933年のワイパフ本願寺の事例と類似し、沖縄の中部のかつての盆踊り（エイサー）の装束を踏襲したものである可能性が高いと考えられる。

## VI. おわりに

沖縄県出身者として蔑まれたとされる生活環境下において、彼等の芸能は入植後20年の歳月をかけて広く認知され根付くこととなった。アイデンティティの表出として沖縄県系人が最も用いた芸能は、日系人社会との友好的な関係性を保つためにも重要な手段となっていたようである。それは、マウイ島の沖縄県系人が公的な場で最初に催した芸能が、矯風劇であった点だ。劇は、日系社会で行われていた矯風活動の一環として、沖縄県系人が自ら創作したものだった。その点において、沖縄県系人と本土系出身者とが互いに接点を持ち、歩み寄る意識が垣間見える。

日系人社会の中で「琉球盆踊」は、琉球古典音楽とは異なる大衆的な芸能でありながら、秩序立てられた踊りとして、継承されてきた。近代見られたような一般的に大衆的な沖縄民謡を蔑み、琉球古典音楽のような伝統的で高尚な音楽を良しとする傾向とは大きく異なる。このような沖縄芸能の表出にみられる大きな差異は、多民族社会という環境がもたらした特徴の一つとして捉えることができるのではないだろうか。また、マウイ島においてそれを可能にさせたのは、芸能に対し、受け入れる側の本土系出身者と日本本土の沖縄の芸能に対する風潮が大きく影響していたことも重要な点である。

演目については、本来の祖先供養のための念仏歌が用いられていることから、大方その目的は移民先において変化は見られない。それは現在のハワイにおいても入場および最初の演目に念仏歌を用いる慣習の原点であると考えられる。しかし、沖縄のエイサーがコンクールを通して芸能を変化させたように、競演会を通して人に見せるという他者の存在は、芸能に変化を与える影響が大きい。日系社会の一員として本土系出身者の視点があるほか、

多民族社会における他のエスニックグループの存在もまた、マウイ島の沖縄県出身者に十分に高い水準の踊りを行わせた要因のひとつだったと考えられる。誰もが参加できる大衆的な踊りから、より洗練された舞踊へと向う力が働いたことによって、同郷者の集団的な意識（一体感）が生まれ、アイデンティティの維持に対しても大きく寄与したと考えられる。最後に、沖縄のエイサーとの装束の類似性を指摘したが、その点はあくまで類推として解釈しておきたい。移民先における沖縄芸能の展開の土台には、移入した当時の沖縄芸能の様相をみることができる。今後は、離れた土地の沖縄芸能からもまた、沖縄の芸能史を考察する上での重要な資料と、あらたな見解を示唆することができるだろう。

本論文を作成するにあたり、オアフ島ならびにマウイ島滞在中に貴重な資料や御助言を頂きました慈光園の関係者の皆様、Hawaii Young Okinawan の皆様、マウイ沖縄県人会の皆様、臨済宗妙心寺派ハワイ開教院の関係者の皆様に対し、感謝申し上げます。加えて、議論を通じ多くの示唆ならびに貴重な資料を提供していただいた沖縄県立芸術大学の三島わかかな氏、同博士課程の飯田くるみ氏に感謝いたします。

## 注

- 1) 飯田耕二郎 1998 「マウイ島における日本人の居住地と出身地・職業構成」 沖田行司編 『ハワイ日系社会の文化とその変容』 p.297 所収の地域（島）別の出身県上位順位表を参照。
- 2) 盆行事は「ボン・フェスティバル」(Bon Festival), 「ボン・カーニヴァル」(Bon Carnival) と呼ばれている。最近では本来の目的である先祖供養の意味合いを含め「ボン・セレモニー」(Bon Ceremony) だと主張する人もいる。
- 3) このようなスタイルは比較的に新しく、1990年代から定着を見せたものである。
- 4) 慈光園では1990年代より2日間開催のうち1日を本土系盆踊りに当てたことにより、両日の踊り手の顔ぶれは大きく異なり始めている。マウイ島の臨済禅はかつて2日間、盆踊りを行っていたが近年では1日だけの開催としている。
- 5) 中原ゆかり 2002 「ハワイ日系人のボン・ダンスの変遷」 p.184.
- 6) 中原ゆかり前掲 p.185 によると、マウイ島では、1914年に曹洞宗満徳寺（1906年建立）の境内において開催した盆踊りが寺院で行われた初めての開催ではなかったかと報告されている。
- 7) 1918年7月30日 『馬哇新聞』.
- 8) 比嘉太郎 1974 「二 ハワイの琉球芸能」 『移民は生きる』 p.275 ほか.
- 9) 刊行当初、沖縄県人の名が伝えられる記事は、事故や死亡記事が中心であった。『馬哇新聞』を通読した結果、1919年9月9日の「沖縄県人会」の発会記事が、沖縄県出身



者の動向を伝える最初の記事のようである。

- 10) 競演会は踊りだけではなく、独唱の競演会なども催された。独唱の競演大会は地域単位の勝ち抜き戦を行った後、勝者がオアフ島ホノルルの大会に出場するといったハワイ諸島全体を巻き込む日系人イベントとして定着していった。盆踊や流行音頭踊り、独唱を競い合うと銘打ったこのような風潮は、興行の集客へつながり、遂には、佛教寺院の盂蘭盆会の余興として取り入れられ始めるようになった。1939年には各国人の踊競演会へと発展し、日系人社会のイベントの枠を越えての流行となった。
- 11) 1933年10月3日『馬哇新聞』。
- 12) 1934年7月13日『馬哇新聞』。
- 13) 新聞記事には、多くの各プランテーション耕地内の庭や空地で行われた盆踊の内容は主としてその開催時期や内容を伝えられておらず、広告などが出されることは稀であった。一方、寺院では佛教行事の一つとして盂蘭盆会の余興として結び付き、どの地域の盆踊を催すのかを広告に掲載するのみであった。
- 14) マウイ島のハワイ開教院（臨濟禪）を含む沖縄系盆踊を継承する寺院や団体が継承している念仏歌は「親の恩節」ではない。現在用いられる念仏歌は、南無阿弥陀仏を冒頭に挿入した「継親念仏」だけである。
- 15) 遠藤美奈「海外における沖縄民俗芸能の実践 ―ハワイ・マウイ島のウスデーカー」『ムーサ』10号, p.46-47.
- 16) 比嘉武信『ハワイ琉球芸能誌』 p.111-112.
- 17) 1930年7月18日神山三郎氏については、『ハワイ年鑑』（昭和5-6年）の移民者名簿にハワイ島在住のコックとの記載があるが、舞踊等の指導者であったかは不明。
- 18) 1934年9月7日「舞踊競演大会の懸賞法変更 一等より七等まで」『馬哇新聞』。
- 19) 1933年8月26日『布哇報知』。
- 20) どの採り物を指しているのかは不明。
- 21) 松田米雄編 1998『エイサー』p.34, 50.
- 22) 字楚辺誌編集委員会編『字楚辺誌 ―民俗編―』p.345.

## 文献

- 遠藤美奈（2009）「海外における沖縄民俗芸能の実践 ―ハワイ・マウイ島のウスデーカー―」『ムーサ』第10号：41-49.
- 沖田行司編（1998）『ハワイ日系社会の文化とその変容 ―一九二〇年代のマウイ島の事例―』ナカニシヤ出版.
- 沖縄市企画部平和文化振興課編（1998）『エイサー360° ―歴史と現在―』那覇出版社.
- 沖縄市立郷土博物館編（2008）『第36回企画展 沖縄市のエイサー 伝統の継承者たち』

沖縄市立博物館.

- 城田 愛 (2000) 「踊り繋がる人びと —ハワイのけるオキナワン・エイサーの舞台から」『講座 人間と環境 第8巻 近所づきあいの風景 —つながりを再考する』昭和堂, pp.58-89.
- 城田 愛 (2010) 「踊りと音楽にみる移民と先住民たちの文化交渉の動き—多文化社会ハワイにおけるオキナワン・アイデンティティ創出の揺らぎ」『沖縄・ハワイ コンタクト・ゾーンとしての島嶼』琉球大学 人の移動と21世紀グローバル社会 I, pp.97-126.
- 宇楚辺誌編集委員会編 (1999) 『宇楚辺誌 —民俗編—』宇楚辺公民館.
- 高野義夫編『日系移民資料集 第IV期 ハワイ年鑑 第4巻 (昭和5-6)』日本図書センター.
- 寺内直子 (2000) 「ハワイの沖縄系「盆踊」—ディアスポラの芸能におえる諸要素の重層構造—」『沖縄文化』第36(1), 1-33.
- 寺内直子 (2004) 「海を渡る沖縄の歌と踊り」『アジア遊学 No.66 島唄の魅力』勉誠出版, pp.70-81.
- 中原ゆかり (2002) 「ハワイ日系人のボン・ダンスの変遷」水野信男編『民族音楽学の課題と方法 音楽研究の未来をさぐる』世界思想社, pp.181-203.
- 比嘉武信編 (1978) 『ハワイ琉球芸能誌』ハワイ報知.
- 比嘉武信編 (1990) 『新聞にみるハワイの沖縄人90年 —戦前篇—』若夏社.
- 比嘉豊光 村山友江編 (1993) 『楚辺のアシビ』宇楚辺誌編集室.
- 比嘉太郎 (1974) 『移民は生きる』日米時報社.
- 松田米雄編 (1998) 『エイサー』沖縄文化環境部文化国際局文化振興課
- 山内盛彬 (1928) 「琉球の盆踊」『民族芸術第1巻(8)』地平社書房, pp.49-58.
- 山内盛彬 (1993) 「琉球に於ける傀儡の末路と念仏及び万歳の劇化」『山内盛彬著作集 第三巻』沖縄タイムス社, pp.342-371.
- Sutton, R. Anderson (1983) Okinawan Music Overseas: A Hawaii Home. ASIAN MUSIC 15 (19) :54-81.
- Hawai'i United Okinawa Association (2009) [1984] Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Van Zile, Judy (1982) The Japanese Bon Dance in Hawaii, Honolulu: Press Pacifica.
- 参考日系新聞資料  
『馬哇新聞』『馬哇レコード』『日布時事』『布哇報知』.
- (えんどう みな・沖縄県立芸術大学大学院芸術文化学専攻後期博士課程・民族音楽学)

**The history of “Ryukyu Bon Odori” in Hawai’i before WW II**  
**— Accession and historical background on Maui island —**

Mina ENDO

Graduate School of Arts and Cultural Studies, Okinawa Prefectural University of Arts

(Ethnomusicology)

**Keywords:** Okinawan immigrant society in Maui(Hawai’i), *Ryukyu Bon Odori*, *Eisa*,  
Performing Arts of Okinawa,

“Ryukyu Bon Odori” is a term used for Bon dances danced by Okinawan immigrants in Hawaii. At present, “Bon Odori” danced by people of Japanese descent is generally referred to as “Bon Dance.” However, prior to World War II, the different dances were named after the immigrants’ respective home regions. For example, “Iwakuni Ondo” is the dance of people with ties to Yamaguchi Prefecture, and “Fukushima Odori” the dance of people with ties to Fukushima Prefecture. In this manner, Bon Odori danced by people with ties to Okinawa is called “Ryukyu Bon Odori.”

Because Okinawans had a culture and language different from people of other Japanese prefectures, the Japanese believed that the Okinawans were inferior. This created a feeling of embarrassment of their own culture within the Okinawan community. However, during the 1920’s, the Japanese view of Okinawan culture began to change, and it was no longer considered inferior. In a 1922 “Maui Shinbun”, an article was written in regards to the impressive Bon dance being danced by Okinawans.

The focus of this paper is not only the content of Ryukyu Bon Odori, but also the way that other Japanese viewed it, as well as its historic backdrop in Hawaii. The key area is Maui island, as the Okinawan community there has continued to keep Ryukyu Bon Odori alive. In conclusion, it can be said that the following factors helped to preserve Ryukyu Bon Odori from pre-war days until the present. The Bon Odori of the Okinawan community in Maui is not only beautiful, but it was also regarded highly by Japanese people from other prefectures on the island, received high praise from famous Japanese researchers such as Shinobu Orikuchi, and Hisao Tanabe, and has won competitions of the Japanese association of Maui.

Moreover, the costumes used by Okinawans in pre-war Hawaii was the same as those used by Okinawans in Okinawa at that time. With this in mind, it is thought that Okinawan performing arts in general, dating back to before the war, can be also be studied by looking outside of Okinawa, as in the case of Hawaii.